

キャラクター名  
ましろ

プレイヤー名

シンドローム	アザトース		ワークス	UGNエージェントC	カヴァー	都市伝説系配信者/怪異災害調査員
	アザトース					
オプション			年齢	20	性別	男
覚醒	忘却	衝動	妄想	初期侵食率	31	%
出自	親の理解	経験	記憶喪失	邂逅	大嫌い：人類	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	31
肉体	2		0			2	行動値	9
感覚	0		1			1	(非装備時)	9
精神	6		1			7	戦闘移動	14
社会	0		1			1	全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	3		交渉		
回避			知覚			意志	2		調達	1	
運転:			芸術:			知識:(知識:都市伝説)	2		情報:UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
《午前二時、知らない道》	RC	16r+3		22		単体攻撃
《404 Not Found》	RC	7r+3				80%以降で使用可能:判定19~22+3前後 攻撃力:+26~+32

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
スコップ	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
超血統: 此処より永遠に	P	N		
アリソンヌ・スプーフィン	P 信頼	N 不安		
黒須 虹美	P 好奇心	N 恐怖		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4    残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト:アザトース	2	2	シンドローム	-	-	-	-	
効果:	C値-Lv(上限7)							
冒瀆的存在	1	1	常時	至近	自身	-	-	
効果:	恐怖以外の全てのBSの効果を受けず、メジャーアクションの判定ダイスを+「受けているBSと永続的狂気の数」個する。 侵蝕率基本値+3							
深淵を歩むもの	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果:	移動または離脱の際に使用可、あらゆるエンゲージを無視できる							
彼方より	1	2	メジャー	視界	単体	対決	-	
効果:	攻+LV×2のRC判定の射撃攻撃							
超次元存在	4	4	メジャー	-	-	-	-	
効果:	このエフェクトを組み合わせるで行う判定のダイスを+LV×2							
此処より永遠に	5	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果:	攻+LV×4 使用時に1D10し1なら重圧、2~3なら硬直、4~5なら邪毒3、6~7なら放心、8~9なら暴走、0なら憎悪をメインプロセス終了時に受ける。							
根源的破滅招来	1	3	メジャー	視界	シーン(選択)	対決	80↑	
効果:	射撃攻撃の対象をシーン(選択)にできる。ただし自身のいるエンゲージは含まれない。1シナリオに1回制限							
ありえざる記憶	★	2	メジャー	至近	単体	-	-	
効果:	無力化(戦闘不能であったり眠っていたりする)対象に偽記憶を植え付けるエフェクト。相手がオーヴァードの場合、犠牲者の意志に対してあなたのRC対決が必要となる。このエフェクトは「神性」「神話生物」に対しては効果を持たない。							
惨劇の隠蔽	★	2	メジャー	視界	単体	-	-	
効果:	戦いや儀式によって流された膨大な血、壊された家屋、犠牲者が必死に残した遺言などを傷跡一つ残さず消滅させる。インターネットの書き込みなども消せる。							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

配信者としての有名人はヒカキンレベル

ましろという青年の内側には決して埋まることのない空白がある。それは、幼い日に両親と共に遭った「あの事故」の記憶だ。凄惨な事故現場で、両親は帰らぬ人となった。ただ一人生き残ったましろは、その代償のように日常の裏側に潜む異能のオーヴァードとして覚醒する。しかし、運命が牙を剥いたその瞬間の詳細を彼の脳は拒絶するように封印していた。意識の底に沈んでいるのは脈絡のない断片的な情景だけだ。粉々に砕け散り、街灯を反射して煌めくフロントガラス。深夜の冷たいアスファルト。絶え間なく鼓膜を叩く、激しい雨音。そして、最期の瞬間に刻まれた両親の掠れた叫び。

「見ちゃだめ」  
――震える手で視界を遮ろうとした、母の慈愛。

「この子だけは」  
――絶望の淵で世界を呪うように叫んだ、父の祈り。

混濁する意識の中、ましろが最後に見たのは夜空を埋め尽くさんと広がる黒い何かだった。身寄りを亡くした幼いましろを保護したのは、超常的な事件を隠蔽し秩序を守る機関「UGN」だった。彼はそのままUGNの施設で、異能という業を背負ったまま育てられることになる。孤独な彼の世界に光を灯したのは、同じ屋根の下で時を過ごしたPC1の存在だった。ましろにとってPC1は、背中を預ける単なるエージェントではない。血の繋がりを超え、共に地獄の淵から這い上がってきた唯一無二の「兄弟」とも呼べる存在。失われた過去の記憶を抱えたまま、ましろは今日もその背中を追い続けている。